カリオカの風

リオデジャネイロ日本人学校通信

１１月号

令和５年１１月　１日

校長　小堺 広司

学校教育目標

「自他の生命と人権を尊重し、ねばり強くたくましい心豊かな児童生徒を育成する」

～世界の架け橋となる子どもたちの育成を願って～

『自分たちの思いを形にしよう』～自立を育むリオ日学の教育～

「今日は楽しんでもらえましたか。ここにいる全員が楽しかった！と思ってくれたらいいなと思います。

一期一会という四字熟語があります。この言葉は一生に一度しかないかもしれない出会いを大切にするという意味があります。ぜひ、今日出会った人との思い出を大切にして、この一瞬も悔いが残らぬように過ごし、お別れをしてください。私たちがここで巡り合えたことは、奇跡に近いことだと思います。今日の文化祭が大切な思い出の１ページになれば幸いです。」

１０月２８日（土）文化祭の閉会式。中学部１年・稲垣凛和さんがあいさつをしてくれました。最期のあいさつに文化祭がどれほど充実していたかが伝わり、しばらくその余韻に浸っていたい気持ちになりました。

文化祭の目標は「自分たちの思いを形にしよう」でしたが、最初から最後まで、自分たちの力で築き上げ、リオ日学の子どもたちと、関わる全ての方の大きな宝物となりました。

学校運営委員長の佐藤様からも温かいお言葉をいただきました。「土曜日は素晴らしい文化祭に家族で参加させていただき、誠にありがとうございました。企画段階から生徒の自主性を重んじ、自分でイベントの進め方を考えさせるように仕向けておられたことを娘経由で聞き感じておりました。そういった企画段階の工夫があったうえで、当日は日学らしいオープンかつ明るい雰囲気で会を運営された点も、とても素晴らしいと感じました。娘もこういったイベントの運営をするという貴重な機会を得ることができ、学ぶところがとても大きかったと思います。保護者として大変感謝しております。」

これからも、子どもたちの自立を育む教育をしっかり進めてまいります。

＜全校朝会校長講話より　１１月１日＞

絵本を紹介します。ジャンニ・ロダーリ（1920-1980イタリアの詩人）が1960年に書いた詩「キーウの月」です。キーウはウクライナの首都で、詩を書いたロダーリは、現在起きているロシアとウクライナの戦争を知りません。彼は、第二次世界大戦中、ドイツ・ヒトラーに反発し、戦後も旧ソ連へ何度も行き、自由や人としての権利を主張して童話や詩に著していました。この詩を読んでみて、皆さんは何を感じましたか？

- ウクライナもロシアも日本もブラジルも、どの国でもお月さまはお月さま。見上げる子どももみな子ども。
- 絵本に描かれた白い線と水玉模様は皆に等しく光をとどける美しい月。月の涙かもしれない。さみしい時、孤独を感じた時に、月を見上げることを願っている。
- 遠く離れた大切な誰かも同じ月を見て、つながっている。
- 月の光はすべての国境を飛び越え、国家や人種など関係なく、どんなものも優しく包み込む。
- 月を見て私たちの日常がどれだけ大切かと気付く。
- 皆が落ち込んでいるとき、どこにいても月が闇を照らし、自分を見失わず、希望を抱いて生きていける。

ロダーリはsperanza（スペランツァ＝期待に応えてくれる人やモノ）という言葉を好み、自分を否定したり手に入れられないものに対して不満を抱く時こそ、月を見上げ、speranzaとつぶやき「また明日」と過ごしました。

新美南吉の「でんでんむしのかなしみ」を朗読します。でんでんむしのように「殻いっぱいの悲しみ」＝「生きていくことは楽ではない」と実感したことがありますか？でんでんむしは最後に「もう嘆くことをやめた」とあります。この物語から私たちは「だれでも深くものを感じたくさん傷ついている」「傷つくことは自分一人ではない」ことに気づきます。上皇后美智子様は「でんでんむしのかなしみ」を引用して「本の中で人生の悲しみを知ることは、自分の人生に幾ばくかの厚みを加え、他者への思いを深める」と話されました。絵本からもたくさんのことが学べます。

１０月２７日から１１月９日まで、「読書週間」です。本を読み、仲間への思いやりの気持ちが深まると良いですね。

○ 文化祭・名場面！

＜１～３年生・合奏＞

ミッキーマーチを小太鼓だけかと思わせ、舞台袖からリコーダー・鍵盤ハーモニカ・タンバリンが続く、心憎い演出と軽快なハーモニーに、思わず手拍子が生まれ、口ずさみたくなる演奏でした。

＜５年生・合奏＞

音色の響きと和音が違う３種の木琴、曲の厚みを醸し出す鉄琴のバランスが良く、しっとりとした演奏に「コンドルは飛んでいく」のフォロクローレの世界に会場が包まれるようでした。

＜中学部・合奏＞

かっこいい。真剣な姿ほど、心を打つものはありません。しみじみした「大きな古時計」のハーモニーに聴く者が魅了され、曲の余韻が会場に残り、最上級生にふさわしい貫録を見せてくれました。

＜全員合唱＞

毎朝、教室で歌の練習を積み重ね、強弱に気を付け、パートに釣られないように音取りをして、歌詞に心を込めることを学び、強い気持ちでステージに上がりました。

曲の終わりに美しいハーモニーが響くと、「いのちの歌」の歌詞に心を揺さぶられ、生きていることのありがたさが伝わります。

心をひとつに作り上げたハーモニーは最高の勲章です。

＜連邦大の演劇・私たちへ伝えたいこと＞

オリジナル脚本にたくさんのメッセージが込められ、衣装・大道具・小道具に工夫が凝らされ、熱心な大学生達のエネルギーを感じます。

リオデジャネイロは心優しい街であり、その本質に気付いた時に人と人との交流が始まることを伝えようとするストーリーでした。練習時間が少ない中、リオ日学にもリハーサルに来て、素晴らしい演劇でした。

＜劇・桃太郎オリジナル脚本！＞

原作の桃太郎をアレンジして脚本を作り、登場人物を保護者や連邦大のブラジル人にも依頼し、皆で作り上げた劇でした。

毎朝声出し・セリフ合わせ・動きの確認を繰返し、人生初の劇に戸惑うこともありましたが、成し遂げた達成感は格別です。

皆ひとつ大きく成長しました。

＜カラオケ・歌うことも運営も＞

Googleフォームで出演者を募ると、日本人もブラジル人もこぞってエントリーし、子どもたちは運営をやりながら、自分たちもしっかり歌い、会場がひとつに盛り上がりました。

親子で歌ったり、親子で審査したり、ブラジル人よなぜその歌を選んだ!?という選曲だったり、最高のエンタメでした。

＜クイズ大会・昭和のかたち＞

「クイズ１００人に聞きました」という往年のテレビ番組を工夫し、ブラジル人と日本人に答えてもらったアンケート結果の順位を当てるクイズを司会者が、珍回答に突っ込みを入れながら盛り上げてくれました。

回答者でなくてもなるほどと思う問題があり、会場みんなで楽しめました。

＜「いのちの歌」 歌に涙し、元気がわく ＞

「いつかは誰でも この星にさよならをする時が来るけれど 命は継がれてゆく」

子どもたちが歌う歌詞には未来の明るい希望と決意を感じ、合唱を聴く私には、幼いころの自分、家族との成長や亡くなった両親の思い出が蘇り、人生をしっかり生きなければとしみじみします。

ご指導くださった熊本先生に「よくぞこの歌を選んでくれました」と感謝しました。遠く故郷を離れてブラジルで暮らし、何か忘れ物をしたような気持ちになる時がありますが、歌に涙し、また明日！と元気がわいてきました。